

<ケース①夜道を歩く OL>

はじめまして。

俺はどこにでもいる平凡な日常を暮らしている、ただの40歳の男だ。  
そんな俺の前に、今こんなチャンスが訪れていた。

真っ暗な夜道。

目の前には無防備にも20代くらいのOL風の女性が一人で歩いている。  
周囲には誰もいない。

そんな環境でこんな感情を持たない男は、男ではない。

それは

「あの女をレイプしたい。泣きじゃくる顔を見ながら中出しして絶望させてやりたい」

「はあ……はあ……はあ……」

そう思いながら俺は息を荒げていた。

「あ～……ヤリてえ……」

だがしかし、このご時世。

さすがにレイプはマズいだろう。

でも脅して黙らせればバレないんじゃないか？ いや、ダメだろ。

一回やったらもう歯止めがきかなくなるぞ。

でもこんなチャンスも、もう二度と来ないかもしれない。

そんな葛藤をすること1分

俺は決断した。

「よし、あの林に引きずり込んでレイプしよう。」

今から本当にレイプをしようと思うと、興奮で心臓が破裂してしまいそうなほど興奮した。

「ふうー！ふうー！」

そして呼吸を整えたあと、俺は全力疾走をしてその女性を追いかけた。

「待ってくれええ！！」

すると女性は振り返り、こちらを見た。

「はい？」

キョトンとした表情をしている。

まだ状況を理解していないようだ。

「逃げられる前に早くしないと」

そして俺は、女性の肩に手をかけた。

「きゃあっ！？なんですかいきなり！」

「静かにしろ！！騒ぐんじゃねえ！！」

「ひっ……」

女性が恐怖を感じているうちに、素早く口を塞いで後ろ手に拘束し、

「んっ！？んぐう～！！！」

そのまま近くの林の中に連れ込んだ。

「へへへ……これでもうお前に逃げ場はないぜ」

「んんっ！んん～ッ！！（誰か助けてええ！！）」

必死になって叫んでいるが、ここは人通りの少ない住宅街。

いくら叫んだところで誰にも聞こえないだろう。

「おい、あんまりうるせえと痛めつけるぞ」

そう言って睨み付けると、彼女はビクッと震えた後大人しくなった。

「わかればいいんだよ、お嬢さん♪」

まずはこの邪魔な衣服を脱がせる必要がある。

なので俺は彼女の上着に手をかけ、恐怖心をあおるようにゆっくりと脱がしていった

「うわぁ……いい体してるねえ♡」

ブラジャーに包まれた大きな胸が露になった。

「へへ……こいつをこうしてやるよお」

そして俺は、彼女の胸に手を伸ばした。

「ひいっ……やめてくださ……」

ギュムウ

「んっ！？んんっ！んんんっ！！！」

俺の指先が柔らかいおっぱいに触れた瞬間、彼女は体を震わせた。

「くっくっく……どうだい？今からお前はレイプされるんだぞ！」